



Title	J. M. Synge の喜劇における 'reality' : 現実と夢の調和
Author(s)	栞田, 良一
Citation	Osaka Literary Review. 1965, 3, p. 74-81
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/25819
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

J. M. Synge の喜劇における ‘reality’ —— 現実と夢の調和 ——

栞 田 良 一

上演を前提とする戯曲——特に写実主義手法の近代劇——においては、相対立する二つの要素の葛藤による劇的行為の展開が必要条件として存在しなくてはならない。この要素を欠くことは劇的行為にとって決定的な弱点となり、そのため戯曲としての存在価値を失うおそれさえある。この点については、J. M. Synge の戯曲も例外的ではなく、上記の要素を十分に備えている。

以下の考察において、私は、総括的な Synge 論を試みようというのではなく、彼の戯曲——特に喜劇——における ‘reality’ を相対立する二要素の関係づけから探ってみたいと考えている。

彼の六篇の戯曲の中、悲劇 *Riders to the Sea*, *Deirdre of the Sorrows* を除いた他の四篇の戯曲 *The Shadow of the Glen*, *The Tinker's Wedding*, *The Well of the Saints*, *The Playboy of the Western World* は、夫々互いに異なる特徴を有してはいるが、何れも喜劇の範疇に属するものである。*The Playboy of the Western World* の序文において、『‘reality’、それはすべての詩の根源である』或は『舞台には ‘reality’ がなければならないし、喜びもなければならない』(p. 174.) と述べている Synge の ‘reality’ なるものが、これらの喜劇において、如何なる形象で示されているかを知ることによって、彼の現実に対する認識の一端が明らかになろう。

先の四篇の喜劇において各人物は現実に対して如何に対処し反応しているか。こゝで私が「現実」といっているものは、人間の共同体としての一般社会的な現実(或は、世間的現実)のことであり、Synge の言葉を借りていえば、『物質的な世界』という言葉で置き換えることもできるが、現

実の生活秩序、或は、自らがその中で生活している環境といった方がより明瞭になろう。Synge の喜劇における人物の現実への対し方は大別して二通りあり、それは、現実への順応的な態度と対立的な態度によって示されている。この後者——現実不適應の立場——に焦点を合わせることが取りも直さず Synge の ‘reality’ を知る機縁となるであろう。何故なら、この後者の立場が、彼の喜劇において、現実を認識する存在として現わされているからである。

The Shadow of the Glen において現実との対立を示すのは Nora Burke であり、彼女は物質的安定を求めて Dan Burke なる老人と結婚してはいるが、彼女及び浮浪者の言葉——例えば Nora Burke の ‘... what good is a bit of a farm with cows on it, and sheep on the back hills, when you do be sitting looking out from a door the like of that door and seeing nothing but the mists rolling down the bog, and the mists again and they rolling up the bog, and hearing nothing but the wind crying out in the bits of broken trees were left from the great storm, and the streams roaring with the rain.’ (p. 25.) 或は、浮浪者の ‘... sitting up on a wet ditch, the way you’re after sitting in this place, making yourself old with looking on each day, and it passing you by.’ (P. 31.) ——これらの台詞にも示されているように、陰うつな自然に裏付けられた無為な生活に彼女は満足することができない。そこから彼女の夢は生じ、それは若者 Michael Dara に向けられる。このようにして、現実と夢との調和を求めてのこの両者の彼女の内的葛藤が、*The Shadow of the Glen* の劇的行為を支配していくことになる。現実の無聊の慰めとしての彼女の夢は、この物質的にして無気力な若者によって幻滅となり変り、同時に、その夢は、Dan によって代表される現実との衝突によって、物質的に安定した生活を失わしめる原因となる。現実生活とは相容れないものとして彼女の夢は示され、それは現実的には敗北者の形をとっているが、彼女の夢、即ち、豊かな生活を求めての彼女の希望はこゝで挫折のまゝ留まりはしない。拒まれた夢は他の夢へと転化している。浮浪者と共にこれまでの住家を出る Nora の夢は、豊かな自然の世界と連なり、それは過去の無為な陰うつさとの訣別を意味

している。現実を捨て想像に生きると見做すことができよう。

The Tinker's Wedding において劇的行為を進展させるのは Sarah Casey の夢と現実との葛藤である。彼女は婚礼という世間的な約束事に夢を託して、自らの生活とは無関係な他の現実——牧師によって示されている「物質的な現実」——と関係を持つに到る。しかし、彼女のこの夢は、自らの現実——放浪するいかけ屋の生活——を拒否するところに生じたものではなく、彼女の——‘... the spring-time is a queer time, and it's queer thoughts maybe I do think at whiles.’ (p. 62.) ——この台詞にある通り、春に起因する偶発的なものとして提出されており、彼女自身も自らに不自然なものであることを感じている。この夢が、物質的な現実との衝突の結果、挫折に終り、彼女は自らの現実に戻ることになるが、挫折した夢は彼女の想像力によって転化することもなく、単なる夢想として消失している。従って、戯曲の背後にある課題は、相異なる現実の比較によって示されることになり、そして、この異質な二つの現実を顕著に示す役目を果たしているのが Mary Byrne と牧師の対照的な存在である。

The Well of the Saints における盲人夫婦 Martin Doul と Mary Doul は盲目の故に現実との視覚による交渉を遮断されており、そのため現実を想像力によって美化し豊かなものとして自らの夢となし、その夢の世界に住んでいる。処が、聖者の力によって視力を回復した二人にとって現実是非情にして醜悪なる姿を呈し、彼等の夢は幻滅と化すに到る。早々にして再び盲目となる二人——特に、夢と現実との葛藤に積極的な働きかけをなしている Martin Doul——はそのため聖者によって再度開眼されること、即ち、現実に戻れることを断固として拒絶し、村人達の意に反して、夢の世界に留まることを望む。しかし、この戯曲においても現実には彼等の夢を認めようとはしない。他方、一旦現実を見知った上では、その同じ現実の土台の上に彼等の夢を築き直すことは不可能である。*The Shadow of the Glen* 同様、こゝでも夢は現実的には敗者として追われる立場にあるが、現実によって幻滅と化した夢は想像力の助けによって新たな夢として現われ、それは他の未知の現実¹に託されることになる。

The Playboy of the Western World において夢を具象化するのは

Christopher Mahon (通称 Christy) なる若者で、他から彼に与えられた夢と現実との葛藤が劇的行為を進展させ、その結果、夢は現実化するに到る。この葛藤の発端と過程に積極的に参加しているのが、Margaret Flaherty (通称 Pegeen Mike) を初めとする Mayo の村人達の現実であり、そしてこの同じ現実が Christy の夢を挫折の方向に向けている。処が、彼は挫折した 'playboy' としての夢を想像力によって他に転化させることなく、また、夢を幻想として終らせることもしない。物質的にして無気力な現実から与えられた夢は、彼の想像力によって拡大され、現実の認識と相俟って、彼の内面的な現実を変化させており、彼は 'a dirty stuttering lout' (P. 229.) 或は 'an ugly young blackguard' (P. 232.) から 'a likely gaffer' (P. 270.) となり、夢の体現者として世間的現実を乗り越えるに到る。

以上四篇の喜劇において、夢と現実の葛藤という角度から、劇的行為の展開を説明したわけであるが、構成上対立しているこの二つの要素は、夫々の戯曲において決して一様に取り扱われてはいない。 *The Shadow of the Glen* においては、現実満足し得ない処に——言い換えれば、現実の否定的な面への認識から——夢が生まれ、この夢の現実による挫折は更に他の夢を生じ、この過程において大きな働きをなしているのが想像力である。そして、現実を認識する Nora Burke と浮浪者には豊かな想像力が与えられ、現実を認識せぬ Dan Burke と Michael Dara は想像力を欠いた存在として示されている点に作者の志向がうかがえる。現実を認識せぬ処に想像力は無く、想像力が無いということは、 *The Tinker's Wedding* の序文にもある通り、演劇をつまらないものにするという彼の演劇観同様、戯曲に示されている作者の人生観でもあると考えられる。結局、人生においては、想像力は現実の認識の上に生じ、そのある限り、夢は決して幻滅感として終ることがないわけである。「現実・想像力・夢」この三者の有機的な関係が生活条件として人間生活に必須のものであり、この関係を可能ならしめるような現実への対し方が彼のいう 'reality' であると理解できよう。この点から見て、殆ど同一の構成を有していると目されるのは *The Well of the Saints* である。先ず現実を知らぬ処に夢の生活があり、その夢を現実によって確認することを望んだ結果が逆に現実による挫折となり、こゝで初めて現実への拒否の態度が示され、元の夢

へ戻ろうとするが、それは既に幻滅と化し、夢として留まり得ない。そこで新たな夢が想像力によって起こされることになる。前者の喜劇と同工異曲の構成であるといえよう。Nora Burke も Martin Doull, Mary Doull も共に生活を離れた夢に美を求め、喜びを求めている。これは彼等の現実生活の中の美しさ・喜びを否定し、現実生活をすべて醜悪なるもの・不快なものとして規定する働きをなすものであるから、彼等自身の現実生活が現実によって破壊される結果となるのも、作者が醜悪さや不快さを肯定しない限り、当然の帰結といえるわけであり、若し劇的行為がこのような経過をたどるのでなければ、realism の手法に破綻が来たことになる。この二篇の喜劇において、現実には劇的行為を進める二要素の一方としての働きをなしてはいるが、Synge の態度は現実を認識してそれに立ち向うものではなく、また、その認識は現実の醜悪なる面への認識となっているが故に、想像力による現実からの逃避の傾向をとり、究極的には想像力は現実から夢の世界へ飛躍する橋渡しの役目を果たしている。そして、この想像力があるが故に、本来調和し難き現実と夢は人間生活において調和を可能ならしめられているわけである。即ち、現実の認識から起こる夢と現実との不調和に対して、人間生活におけるこの両者の調和を想像力の作用に見出だしている処に彼のいう‘reality’を理解するすべてがあると見做すことができる。即ち、調和の不可能な現実と夢を調和させるためには論理の超越が必要となるわけで、この点に Synge の夢と現実の調和に対する可能性が存し、この調和のための現実認識が彼のいう‘reality’であるということになる。*The Tinker's Wedding* においては、劇的行為の展開をもたらす現実と夢の関係は前二篇とは異なっている。野性的で精力的な現実（いかけ屋の生活）からの偶発的な夢が、物質的で無気力な世間的現実（牧師によって表わされる生活）へ向けられている。そして、この夢が単なる幻想として終るということは、想像力に満ちた野性的な世界の肯定、想像力を欠いた世間的現実の否定を意味し、構成上は異なる二つの現実が対立的に示されていることになるが、この前者が、作者のいう‘the rich joy found only in what is superb and wild in reality’ (p. 174.) を与えるものとして、即ち、想像力を喚起する現実として作者の夢とつながっていることを理解すれば、視点の相違こそあれ、作者の‘reality’は前二篇と同様に解釈され得るわけである。*The Playboy of*

the Western World においても夢は現実の否定的な面を補足するものとして生じるが、前三篇の喜劇とは異なり、こゝでの夢は挫折の結果転化することも幻影として終ることもなく、遂には現実化されている。想像力の現実への能動的な働きかけとして Synge の態度は積極性を有しているといえよう。従って、夢と現実との調和をもたらすために想像力による補足を可能とするような現実認識が人生における彼のいう ‘reality’ であると認定するだけでは不十分となるわけである。この *The Playboy of the Western World* を得て、彼のいう ‘reality’ は更に付加的に是正されねばならない。この戯曲においては、想像によって求められる夢は、単なる逃避としてではなく、現実に関わりかけ、それを変革する可能性を有している。従って、夢の実現可能性が現実の変革と調和する処に人生における彼のいう ‘reality’ への認識があると考えられるわけで、この説明の限りでは、現実と夢は、両者の葛藤による劇的行為の展開の結果、必然的に調和へと到っているように受け取れるが、その調和をもたらすのが想像力であり、彼のいう ‘reality’ はその想像力を澆刺たらしめるための手段として戯曲における必要性を認められているものであるという点に、調和が劇的行為の論理的な展開の結果ではなく、論理の超越によってもたらされているといふ得る根本的な理由がある。結局、Synge の喜劇においては、‘reality’ とは想像力による現実への反応——その反応の仕方が如何なるものであれ——それを夢の可能性において捉えることができるような現実の認識であると判断できる。そして人間に内在する humour は、作者によって、現実生活の矛盾を示すために、同時に次の *The Tinker's Wedding* の序文の一部——‘Of the things which nourish the imagination humour is one of the most needful, and it is dangerous to limit or destroy it.’ (pp. 59-60.) ——にみられるように想像力を養うに最も必要なものとして理解されており、そこに起こる笑いと喜びは想像力の ‘nourishment’ (p. 59.) であり、そのある限り ‘the refinement of old societies’ 或は ‘natural ideal’ (*The Aran Islands*, p. 32., 以下 A. I. と略す) に適う人間性は現実生活——物質的文明——によって打ち消されることは決してないと彼は見做している。これは人間の魂の明るい面への Synge の信頼と希望を示すものであろう。だが、こゝで彼のいう想像力の基盤を再考してみる必要がある。そ

れは現実生活を土台として現実そのものに志向している——即ち、生活認識の上に立つ——ものではなく、生活への否定的な認識がそのまゝ想像力によって人間の本来性という夢に向っている。そのために、Synge は ‘wild’ (cf. *A. I.*, p. 32.) な ‘primitive’ (*A. I.*, p. 57.) なもの及びその世界の中に ‘singularly spiritual expression’ や ‘strange beauty’ (*A. I.*, p. 19.) を認めることになり、他方、‘civilization’ は家庭を ‘desecrate’ (*A. I.*, p. 57)——即ち、家庭の神聖さを汚すものであり、物質的な ‘prosperity’ は ‘falling off’ (*A. I.*, p. 86.) を伴い、その他 ‘modern quality’ (*A. I.*, p. 86.) はすべて否定の対象となっている。だから、彼の喜劇における現実と夢は、文明につながる物質と因襲にとらわれない本来の人間性という意味での精神という形で置き換えることのできるもので、この意味での現実——物質的実在の概念——は後者、魂の概念によって打ち消されていることになるが、といって、Synge の劇作法は決して形而上的ではない。劇においては形而下の行為を取り扱わねばならないという彼の態度は、前述の序文からもうかがうことができようし、実際彼の作品においてもその通り示されている。それで、彼は、現実を否定するだけでなく、それに代って願望を満たすものとして自らを解放する夢の世界に逃れながらも、神秘主義に行きつくことはできないわけである。そこで彼は ‘what is superb and wild in reality’ という形で美的現実には到達しようとすることになる。この『崇高なもの』とは魂の世界のことであり、『野性的なもの』とは人間の動物性を意味し、結局は物質世界という言葉に代り得るものである。これは思考方法としては二元論であり、Synge の場合、この二元論が劇中の人間生活において反映されているということが出来る。（論理的にはともかく）人間生活における必要性という面からすれば、この両者は共に必要条件として相互依存の状態にあり、現実とその不毛な状態からの逃避の傾向とは常に調和を保っている。そして、この逃避への志向が挫折する時、想像による逃避が必要となり、想像力はそのための手段となるわけである。即ち、想像力によって現実の相である「矛盾や葛藤」に人間の生存条件としての統一が与えられ、調和がもたらされているということは、その想像力が論理を超越するための手段として作用しているという以外に解しようがない。ということは、Synge の主観的経験（或は、情緒的経

驗)が自己と環境の間の balance を保っているということであり、彼の喜劇——それは写実主義手法をとっているとはいえ——そこにおける‘reality’は結局客観性に基づく論理よりも生き生きした直観に裏付けられたものであるということが出来る。それは、Synge が主観的な感情と客観的な経験の接点に劇的行為を押し進める葛藤を見出だしながら、その劇的行為の展開の結果は、無限に高められた情緒である夢という形を出ず、結局、現実相の矛盾からくる葛藤の中止によって現実と夢の調和がもたらされているということになる。

以上の考察は、Synge の dramaturgy 理解のための手引として、一つの材料を捉えんがために試みたものである。

付記. 本稿は日本英文学会第35回全国大会(於同志社大学)における研究発表を修整したものである。猶、本文中の引用は *Plays by John M. Synge* (George Allen and Unwin Ltd., 1958.), *The Aran Islands* (George Allen and Unwin Ltd., Reset, 1961.) に依る。